



Title	「中期モンゴルのハーンとサイトの関係について」
Author(s)	森川, 哲夫
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1973, 6, p. 19-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47957
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「中期モンゴルのハーンとサイトの関係について」

森 川 哲 雄

(一) はじめに

中期モンゴル、すなわち明代モンゴルにおける支配者階級はいくつかの種類に分けられるが、その代表的なものは、「ノヤン noyan」と「サイト sayid」と総称された者たちである。普通ノヤンはボルジギン氏族の領侯を指し、サイトは非ボルジギン系の領侯を言う。勿論両者の間は元朝時代から厳然たる区別はつけられてはいたが、このような形で総称されるのはこの時代の特徴の一つである。

サイト sayid という言葉自体は元朝時代にも用いられてはいるが、このように領侯の特定の階級を指すような意味には用いられず、単に「善者たち」という意味にすぎない。⁽¹⁾元代では中期とは異って普通の領侯たちも「ノヤン」と呼ばれていたことは周知の通りである。

この「サイト」という言葉が始めの意味から転じて非ボルジギン系の領侯の総称となり、また「ノヤン」が専らボルジギン系の領侯を指すようになったことは、当時の両者の関係を知る上で興味のあることではあるが、今のと

ころその転換の時期、その事情等をつかつめるだけの史料を持たない。

もつともノヤンの称号はこの時期においてはや、広く用いられたようで、オルドスOrdosの八白室Naiman čaγan gerの神官(Ger-im noyan)⁽²⁾やオイラトの若干の領侯、更にはチベット⁽³⁾の僧に対しても用いられている⁽⁴⁾。しかしながらこれは特別な例にすぎず、ノヤンの称号が殆んどボルジギン氏族の領侯を指したことに変わりない。

「サイト」と称される者は、蒙文年代記において、普通ハーンもしくはその同族の者に仕え、彼らのためにいろいろな援助をなす者として現われる。身分的な関係から言うならばサイト階級はノヤンの下にあり、このことは当然といえば当然であろうが、力関係においても常にそうであつたわけではない。少なくとも十五世紀において圧倒的な勢力を誇り、政治的主導権を握つていたのはサイトたちであり、彼らがモンゴリアの多くの集団を支配していたことは周知の通りである。

ところが十六世紀以降この関係が逆転し、ボルジギン系の、それもダヤン・ハーン Dayan qaγan の後裔たちがだんだんとモンゴリア各地に浸透し、遂にはボルジギン氏一色に塗りかえられてしまう。因に言うなら、ダヤン・ハーンの息子たちが、「分封」⁽⁵⁾を受けた段階では若干のトゥメン tūmen とチャハルČaγar内のいくつかの集団がその支配下に入っただけであるが、次の世代では六つあつたと言われるトゥメンの殆んどとトゥメン内のオトク otok⁽⁶⁾が、更に次の世代ではモンゴリアの殆んど⁽⁷⁾のオトクがその支配下に入るようになる。

十六世紀に起つたこのような現象について、ウラジーミルツォフ В. Я. Владимирцов はその著『蒙古社会制度史』(Общественный строй Монгола монгольский кочевой феодализм, Л., 1934)の中でいくつかの指摘をしている。それを簡単にまとめるならば次のようである。⁽⁸⁾すなわち中国における元朝の崩壊後モンゴリアに生

じた内訌戦争、ハーンの廢立等は、根本的にチンギス・ハーン家の諸侯とサイト階層の争いであった。十六世紀頃に至ってこれがチンギス・ハーン家の勝利に終った。この原因はハーン家が若干のサイトの支持を得た他、中国に對する掠奪や通商を有効に行えるように、単一の中心と秩序が必要とされたため、と推測している。

ウラジーミルツォフのこの指摘は重要な示唆を与える反面、正確とは言えない点も多い。例えばモンゴリアで展開された「封建戦争」なるものが、十五世紀においてはハーン家とサイト層との戦い、というよりはむしろサイト同士の争いを中心であつたということは、例えばエセン・ハーン *Esen qayan* とアラク・チンサン *Alay Jingsang* の争い、ベケリスン(訛加思蘭)とイスマイル(亦思馬因) *Ismail* の争い等の例をあげるまでもない。これらの十分な理解なくして、ダヤン・ハーン等の擁立は理解出来ない。また中国との経済的な関係は重要な指摘であるが、モンゴルと明との間に正式な、かつ定期的な交易関係が結ばれたのは十六世紀も後半の、しかも傍系のトゥメメト *Tumed* のアルタン・ハーン *Altan qayan* が明と和議を結んでからのことであつてその時すでにモンゴリアに統一政権は無かつたのである。

更に問題なのはその後のサイトたちの状況についてである。ウラジーミルツォフは「サイトは今や眞の封建領侯 *feodal* 中には加われず屢々世襲的のものではあつたにもせよ、単なる役人 *чинобик* に急変し、その管理し得るものも少数の所屬民に過ぎなかつた。」と言っている。⁽¹¹⁾しかしながらこのことは必ずしも十分な根拠をもって言われているわけではない。勿論この見解は十五世紀に現われたトガン *Toyan*、エセン、ボライ *Bolai*、ベケリスン、イスマイル等のような、モンゴリアの殆んどすべて、もしくはかなりの部分にその影響力を及ぼしたようなサイトたちが、十六世紀半ば以降全く現われなくなつたという意味においては正しい。しかしながら、普通の中堅のサイト

たちが急速に「役人」になつてしまつたということには大きな疑問を持たざるを得ない。一体ウラジミールツォフのサイトに關する見解はやや皮層であると言わざるを得ず、またその種々の称号に對する解説も誤りが多く、我々を益することは少ない。

勿論ウラジミールツォフの研究がすぐれたものであることは認めるとしても、このような重要な問題がそれによつて解決されたわけではない。本来ならばサイトについて全面的な検討を加えるべきであるが、それは他日に期し、本稿では十五世紀から十六世紀におけるモンゴルのハーン一族とサイト階層の關係、またその状況を若干眺めてみたい。

(二) ダヤン・ハーンとトウメト部

ダヤン・ハーンは中期モンゴルにおいて最も注目されているハーンの一人である。その擁立について蒙文年代記は女傑とも言うべきマンドゴリ(滿都魯)・ハーン Manduγuli qayanの寡婦マンドフイ・サイン・ハトン Manduγuli sayin qatunの活躍を記している。前ハーンの寡婦が力をふるつた例はこの他にもいくつかみられ、従つてダヤン・ハーンの妃にもなつたこのマンドフイ・ハトンがある程度の力をふるつたことは決して不思議ではない。しかしながら蒙文年代記に記されるマンドフイ・ハトンの活躍は多分に誇張された感があり、このすべてを信ずることは出来ない。⁽¹⁴⁾

ダヤン・ハーンの擁立は、マンドフイ・ハトンの個人的な力によつたというよりはむしろ特定の集團の強力な後押しによつて行なわれた感がある。それはマンドゴリ・ハーン、ダヤン・ハーン時代に、これらのハーンと密接な関

係を結んだ部族集団が見られるからである。それはトゥメト部である。例えば先のマンドフイ・ハトンはトゥメトのエングート・オトク Enggüd otok⁽¹⁵⁾ の出身であったこと、更にマンドゴリ・ハーンとマンドフイ・ハトンの間に生まれたエシゲ・グンジ Esige günji がモンゴルジン Mongyoljin (トゥメト) のホサイ・タブナン Gosai tabunang に嫁していること⁽¹⁶⁾。

これらの例はまだあるがそれらについて検討を加える前にこのトゥメト部について若干述べておく必要がある。トゥメト部は単にトゥメト Timed と呼ばれている他多くの呼称があり、他のトゥメンと比較してかなりとらえにくい集団である。中国史料では単に滴官噴 (Mongyoljin) と呼ばれている⁽¹⁷⁾。またモンゴル史料では十二・トゥメト Arban qoyar Timed⁽¹⁸⁾ とも呼ばれている。その他古くはドロガン (七)・トゥメト Doloγan Timed⁽¹⁹⁾ とも呼ばれたと言われる。これらはすべてトゥメト部の異称であるとされており、和田清氏はこれらの関係を次のように説明されている⁽²⁰⁾。

多羅土蛮とは土默特の義であつて、蒙古源流にも初めは専ら七土默特と言つたが後には多く十二王默特というようになつた。七土默特の旧制は審らかでないが初め多郭朗台吉に属し、後火篩の手を経て、我折黄台吉の領となり、更に俺答に帰したことは事実であろう。

これによれば、トゥメトの構成は七・トゥメト→十二・トゥメトへ、その支配者は多郭朗台吉 (Doγalang tayji) →火篩 (Gosai tabunang) →ダヤン・ハーン→我折黄台吉 (Arsu bolad) →俺答 (Altan qayan) とつづいてなる。

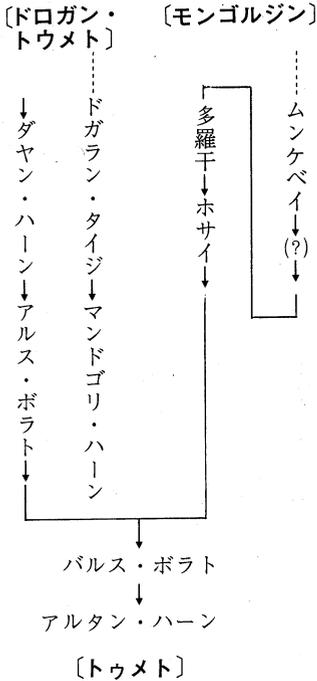
しかしながらこれには疑問が多い。

一般に遊牧民集団が、その名称の前に、その集団が含む姓もしくは基本集団の数を附して呼ばれることが多いことはよく知られている。従つて *Doloγan Tūmed* が七つの集団から成るトウメトを、*Arban goyar Tūmed* が十二の集団から成るトウメトを意味する、ということは当然考えられ従つてトウメトが七↓十二に拡大したと考えることも可能である。しかしながらドロガン・トウメトなる集団は、十二・トウメトと並んで、少なくとも十七世紀の始めまで存在しているのである。更にドロガン・トウメトはダヤン・ハーンの第四子アルス・ボラトに分封されてからずっとその子孫に受け継がれており、アルタン・ハーンがこれらを排除して直接それを支配したという事実も無い。

思うにドロガン・トウメトとモンゴルジンはもともと別集団であつたようである。蒙文年代記ではトガン・タイシの末期にモンゴルジンのムンケベイ *Müngkebei* が現われ、後にエセンに殺されたとあるのがモンゴルジンの初見である。⁽²²⁾ 十五世紀末から十六世紀始めにかけてはホサイ・タブナンの支配下に入ったようであるが、中国史料によればホサイの父として多羅干なる者がみえ、⁽²³⁾ 従つてまずモンゴルジンの支配者はムンケベイ(?) ↓多羅干 ↓ホサイと描くことが出来る。

これに対しドロガン・トウメトはウケクト・ハーン *Ükeg-tü qayγan* を殺害したダガラン・タイジ *Doγalang tayiji* がドロガン・トウメトの支配者であつたということがその初見で、⁽²⁴⁾ その後はマンドゴリ・ハーンに倒されて、ドロガン・トウメトはマンドゴリの支配下に入ったという。⁽²⁵⁾ 従つてドロガン・トウメトの支配者はダガラン・タイジ ↓ マンドゴリ・ハーン ↓ ダヤン・ハーン ↓ アルス・ボラトと描けよう。

ところで皇明九辺考、卷七、榆林鎮の辺夷考に、



満官嗔部下為嘗者八、旧属火箭、今則大酋俺答阿不孩領之。為嘗者六、曰多羅土悶、曰畏吾兒、曰兀菴、曰叭要、曰兀魯、曰土吉刺。

とある。これによれば満官嗔 (Mongyalin) は最終的に俺答 (Altan qayan) の支配下に入ったことが知られるが、これらの集団の中に多羅土悶、すなわちドロガン・トゥメトが含まれることが注目される。直接の支配者は勿論アルス・ボラトの後裔であるが、これがモンゴルジン (トゥメト) に含まれることになった理由は詳らかでない。或いはバルス・ボラトがハーンとなった際に、その力を利用して、自分の直接の領地の一つであるモンゴルジン集団にドロガン・トゥメトを併わせただろうか。以下のことから、トゥメトとその支配者の変遷を図にすると次のようになる。

十二・トゥメトとは恐らくアルタン・ハーンの時代に最終的に成立した集団の総称であろう。明側から「モンゴルジン」が専らトゥメトの呼称として用いられたり、また蒙文年代記で「*Tumed Mongγoljin* とある他に *Mongγoljin Tumed* とも並記されたのは、トゥメトの中でもモンゴルジン集団がもつとも大きく、有力であったからであろう。⁽²⁸⁾

トゥメト部を以上のようにとらえて以下検討を試みたい。そのハーンとの関係の若干の例は先にあげたが、更にダヤン・ハーンの第三子バルス・ボラトがホサイ・タブナン(30)の養子になったこと、更にバルス・ボラトの長子グン・ビリック・メルゲン・ジノン *Gün bilig mergen jinong* はホサイの娘を妃とした他、更にもう一人、トゥメト部出身のタンスク *Tangsurγ* を妃としていることがあげられよう。⁽³¹⁾ この時期の内モンゴルのハーンとその一族において、その妃の出身部族の分っている例は僅かであるが、その大低がトゥメトの部酋と婚姻関係を結んでいることに注目せねばならない。これらの事象は当時の状況からすれば決して偶然の結果ではない。例えば過去にオイラト勢力が東モンゴリアに進出した時、オイラトのトガン、エセンがハーンと多くの婚姻関係を結んでいる。その一つの例としてタイスン・ハーン *Tayisun qayγan* (脱脱不花) の妃の一人がエセンの姉であったことがあげられよう。またやはり西からモンゴリアへ入って力をふるったベケリスンが、マンドゴリ・ハーンを擁立した時、自分の娘をマンドゴリの妃としている。

ハーンとその一族と多くの婚姻関係を結んだトゥメトの部酋も当然ながら大きな勢力を持っていた。まずホサイの父脱羅干は明実録成化十五年五月庚午(一五五)の条によれば、もともとマンドゴリ(満都魯)ハーンの部下であったがイスマイルと共にベケリスン・タイシを打ち倒し、イスマイルを立ててタイシ(太師)としたという。とすればこの時点で脱羅干はイスマイルに次ぐ力を得たことになる。イスマイルの死後、弘治元年にはダヤン・ハーン

と共に使臣を明に送つたりして、その後も健在であつたことが知られている。この脱羅干の勢力はその子ホサイ・タブナンにそのまま承継されたようである。鄭暁の皇明北虜考に

〔弘治十三年〕五月、火篩入大同・宣府塞。火篩本小王子部落、強悍、既屢寇辺、獲財畜、日強盛跋扈、与小王子爭雄長。

とあつて、ホサイ（火篩）が小王子、すなわちダヤン・ハーンと雄長を争つたという。従つてマンドゴリ・ハーン→ダヤン・ハーン時代の時代に脱羅干、ホサイ等がサイトたちの中で一―二番の勢力を有したことは明らかである。従つてマンドゴリ・ハーン→ダヤン・ハーン→バルス・ボラト→グン・ビリク・メルゲン・ジノンと続くこれらすべてがトゥメト勢力と何らかの關係を持つていたことは当然であろう。そしてこれらトゥメト勢力がダヤン・ハーンの即位に関し何の影響も与えなかつたとは考えられない。

すでに述べたように、マンドフイ・ハトンがある程度の力を持つていたことは事実としても、それは必ずしも彼女個人の力だけによるものではあるまい。中国史料に全くその名が現れないこともあるが、これはそれ程の問題ではない。彼女が当時のモンゴリアで何らかの力を發揮し得たとすれば、それは彼女がマンドゴリ・ハーンの妃であつた他に、彼女がトゥメト部の出身で、当時勢力の大きかつた同族の後押しがあつたためではなからうか。マンドフイ・ハトンの父がチヨロスバイ・テムル・チンサン *Coroshai temür čingsang* で、チンサンの称号を持つており、かなり有力な部族の出であつたことも注目される。更に先に引用した北虜考の中で、ホサイ（火篩）が「本小王子部落」と記され、小王子、すなわちダヤン・ハーンと非常に近い關係にあつたことも注目されよう。

かくしてダヤン・ハーンの即位は、マンドゴリ・ハーンの寡婦であつたマンドフイ・ハトンの力によつたという

よりはむしろ、当時の内モンゴルで一、二の勢力を持っていたトゥメト部の後押しによってなされた、と云うことが出来るのである。

このようにハーンの即位に貢献したトゥメト部であったが、その後ダヤン・ハーンと対立をしたということが一部の史料に記される。すなわち、ホサイ・タブナンとダヤン・ハーンが「讐殺」し、ホサイが破れたというものである。⁽³⁴⁾しかしながらこれは例えばバルス・ボラトがホサイの養子になっていること、或いはグン・ビリクがホサイの娘を妃にしている等の関係、或いは史料に対する疑問があり、これらすべてを信頼することは出来ない。⁽³⁵⁾両者の間に対立はあつたとしても、それが決定的なところまで行つたかどうかは疑わしい。今ここでそれを詳しく述べる余裕は無い。ただいづれにもせよホサイの死後、バルス・ボラトがモンゴルジンを領したのは間違いなく、その次子アルタンがそれを承継いだのはそのためであろう。

このように、ダヤン・ハーンの擁立にはトゥメト部を中心とする有力なサイトたちが関係したのであり、かつてのボライ・タイシ、ベケリスン・タイシのような強力な者はいなかつたにせよ、大酋の後立てによるハーン擁立というパターンがこの際それ程異つたわけではなかつた。

(三) 十六世紀後半におけるサイト

ダヤン・ハーンの即位そのものがモンゴリアのサイトたちに与えた影響はそれ程大きなものではない。サイトたちが、一つの転期に立たされたとすれば、それはいわゆる「右翼討征」で、イブラヒム、マンドライが右翼から追放され、それにより、ダヤン・ハーン政権がより強化されたことであろう。この事件が後にハーン一族のモンゴリア

各地へ浸透する、一つのきっかけとなったことは間違いの無いところである。しからばこの事件によってサイト階層はどんな影響を受けたか、もつともこの点については検討するに足る史料は十分でない。ただ注目されるのは右翼討征後に行なわれたとされるダヤン・ハーンの恩賞である。アルタン・トブチは

その後ダヤン・ハーンは右翼三万戸の戦いに助けをなした者をすべてダルハン dargan とした。チャグチャ

Čagča の後裔はノヤン無かれかしとてダルハンとした。オイラトのセグセ・アハラフ *Següse aqalagu* の後裔は七代に至るまで貢納 *alban* 無かれかしとてダルハンとした。

と比較的簡単に記しているのに対し、蒙古源流は整然と、しかもかなり詳細に記している。⁽³⁶⁾

〔ダヤン・ハーンは〕……「バルス・ボラトは我が身に加わつて右翼三万戸の政権を取ってくれたので、右翼三万戸の上にジノンとなるがよい。」と言ってサイン・アラク *Sayin alay* を右翼三万戸の上にジノンとなし置いて、更にボルフ・ジノン *Bolqu jinong* を届けて来た四人、マンドファイ・ハトンに助けをなした四人、サイン・アラクに力を与えた七人、ダヤン・ハーンを奪つて良く育てたタンラハル *Tanlaqar* のテムル・ハダク *Temür qadaγ*、アバガイ *Abayai* (ウルス・ボラト) が殺される時、阻止したハルガタン *Qaryatan* のバ イジュグル・ダルハン *Bayjuγur dargan*、アバガイに力を与えて、エジェンにかくれがを歌い(教えた) 八白室の神官のオルタグート・タイシ *Ortaγud tayiši*、イバライの胸を矢で突き抜いたトゥメトのバヤン・マラト・ダルハン *Bayan malad dargan*、ダラン・テリグン *Dalan terigin* の戦斗に先導して入った左翼万戸の五人を始め、すべての自分の力を尽した者たちに、大ダルハン、赤い勅書、金印、重い称号を賜い、ジャルグート *Jaryud* のバガスン・ダルハン・タブナン *Bayasun dargan tabunang* にマンドファイ・セチェン・

ハトンの唯一の娘、トロルト公主 *Toröltü gūnji* を与えた。

蒙古源流のこの記事は右翼討征とは関係の無いものを含んだり、誤りもあるが、当時のハーンとサイトたちの関係を考える上での一つの手がかりではある。アルタン・トプチ、蒙古源流によれば、右翼を統轄するジノンとなつたバルス・ボラトと、ダヤン・ハーンの女婿となつたバガスン・ダルハンを除き、すべてダルハン（もしくは大ダルハン）にされたという。ダルハンが特権的身分で、その特権の主要なものが貢納の免除であることは周知の通りであるが、右翼部を併合した戦いの恩賞としては必ずしも十分なものではない。少なくともこれらのサイトたちが何らかの新しい遊牧地を得ていないことが注目されよう。史料的な問題もあるが、後世「英主」とされたダヤン・ハーンにそのような事実があれば当然記されているはずである。それではダヤン・ハーンの権力が絶対的であつたためだろうか。もしそうであるなら、このことはダヤン・ハーンの死後、モンゴリアの統一が簡単に崩れ、かつバルス・ボラトがダヤン・ハーンの孫のボデイ・アラクをのけて、一時的にもせよハーンの位についていたという事件を十分説明出来ない。むしろ逆の感がある。例えば「右翼部併合」も従来言われているようにダヤン・ハーン自身によるものというよりはバルス・ボラトの力に負うところが多かつたのではないか。先に引用した蒙古源流は正しくバルス・ボラトがダヤン・ハーンに加わつて、「右翼三万戸の政権をとつてくれた」と記している。またハーンの権力の回復の一つの証拠としてあげられる、ダヤン・ハーンの「諸子分封」も必ずしも彼自身の力により行なわれたものではない。例えば外ハルハの長となつたゲレセンジェ *Geresenje* は外ハルハの有力な領侯から積極的に養子として迎へられたのであり、しかもこの間、ゲレセンジェを勝手に連れていったことに対し、ダヤン・ハーンの大臣が怒つて「処罰しよう」と言つたのに対し、ダヤン・ハーンは「奴隷 *boi*」となして使うのではないから連れていくが

よい」などと言っている。⁽⁴⁰⁾

これらのことは、ダヤン・ハーン自身の力はそれ程強いものでは無かったことを示し、従って彼を頂点とする強力な封建体制が作られたとは到底考えられない。ただダヤン・ハーンが曲りなりにもモンゴリアの一定部分を統轄し、大ハーンとして或る程度の力を持ち得たとすれば、それは右翼部長たるジノンとなつたバルス・ボラトの支えがあつたためであろう。従つて、先の恩賞で、その功績者が十分な報酬を得られなかつたのもこのためであろう。

以上のことからダヤン・ハーン時代に、サイト層がその勢力を後退させたという積極的な理由は無い。

このようにサイト階層がその力を依然として保つ中で、彼等とハーン一族の関係において最も大きな影響を与えたのはアルタン・ハーンの出現であろう。彼の活動についてはすでに和田清氏によつて詳しく述べられているので⁽⁴¹⁾ここでは繰返さないが、例えばダライスン・ハーン Darajisun qayan からのハーン位の授与、⁽⁴²⁾東モンゴルからのオイラト勢力の排撃、明との和議、ウリヤンハンの討滅、或いは黄帽派ラマ教の導入等、その後のモンゴルに与えた影響は甚大なものがあつた。このアルタン・ハーンの方が、モンゴリアにおけるボルジギン氏の基盤を固め、サイト層に対する優位を決定的にしたことは間違いない。

このような力を背景に、十六世紀の終り頃には多くの戦斗行為は殆んどボルジギン氏領侯のイニシアティブにより行なわれている。例えば蒙古源流には一五七二年、オルドスのボヤンダラ・ホラチ・バートル Buyan dara qolaci bayatur サイン・ダラ・チン・バートル Sayindara čing bayatur、ボルサイ・セチェン・ダイチン Borsai ⁽⁴³⁾

sečen dayčing 等が七人のネケルを連れ、歩兵でトグモク Toy moy のアクサル・ハーンに向けて出撃したこと、一五九二年にはオルドスのボシヨクト・ジノン Bosoytu jinson が「オルドス・トゥメンを率いて中国に出撃した

こと」が、更に一五九四年には同じボシヨクト・ジノンがやはり中国に向けて出撃したことが記されている。
 ボルジギン氏族にとって更に有利なことは、アルタン・ハーンと明との和議により、明との交易権を独占的に握ったことであろう。北虜風俗の貢市には

吉囊貢市不隸宣大不載。宣大所市凡五区、宣府之張家口則青把都所部市焉、大同之守口堡、得勝堡、新平堡、山西之水泉營、則順義王所部市焉。

とある。また三雲籌俎考、卷二、封貢考の虜酋市場に記される各互市の「酋長」はすべてボルジギン氏かそれと何らかの關係を持っていた者であった。

このようにして、戦斗、掠奪行為の主導権、中国との交易権、更にはモンゴリアの各集団等を着々と手にしていったボルジギン氏領侯に対して、サイトたちはどうなったか。政治的な主導権は無かったとは言え、決してすべてが「役人 ЧИЮБИК」になつたわけではない。瞿九思の万曆武功録は明周辺の諸酋の活動を記したものであるが、モンゴルに関しては多くのハーン一族の中に混つて、サイトとみられる者が若干記されている。例えば卷十、滾兔列伝に、

滾兔、土蛮部夷也。〔中略〕甲申（一五八四）滾兔与一克大逞・把漢大逞、復聚五千余騎、屯兀魯班、薊刺哈、欲寇鈔遼左。

とあつて土蛮（Timen Jasytu qayan）の部夷滾兔の侵入について記し、更にその讚に「土蛮部以十万数、滾兔六・七酋最大」として滾兔の優勢さを記している。また卷十三、小阿ト戸列伝に「小阿ト戸、青把都部夷也。〔中略〕癸未夏六月、小阿ト戸帥八百余騎、持釣杆木梯、奔黒谷関道夾溝子、鳴礮」とあり、ハラチン Qaračin

の青把都 (Cing bayatur) の部夷小阿ト戸が八百騎を率いて中国に侵入しようとしたという。僅かな例ではあるが、ハーン一族の「部夷」であつても数百から数千の兵を率い戦斗に加わつていたことがわかる。

更にサイトたちは決して遊牧集団の長としての地位を奪われたわけではない。三雲籌俎考、卷三、險隘考には、明万曆後期の長城外の各部酋の位置が記されているが、その中にはサイトとみられる者が少なくない。例えば、鎮口堡に「辺外乾沙溝等处、酋、首、老、亜、失、戶、等、部、落、駐、牧」とあり、また鎮門堡に「辺外驚溝等处、酋、首、敖、不、艾、鉄、木、児、等、部、落、駐、牧」と記される。このような形で、大同より朔州にかけて、タイジたちにまじつてサイトとみられるものが少なくとも十数例記されている。これらの「部落」の規模は不明であるが、ともかくかれらがある程度の集団を支配する領侯であつたことは間違いない。更に一部のサイトたちは、ハーン一族と婚姻関係を結び、その女婿すなわちタブナンとなり、一般のサイトよりも大きな力を持つたようである。⁽⁴⁵⁾ 例えばそれは三雲籌俎考、卷二、虜酋市場において、互市酋長の中にタイジ等と並んで数多くのタブナンの名が記されていることによつても明らかである。なお、タブナンについてはすでに青木富太郎氏の專論⁽⁴⁶⁾があり、これ以上の贅言を必要としないが、これらのタブナンが封建領主であり、タイジと十分対抗し得る程の力を持つていた、という氏の見解に賛成するものである。

以上のように十六世紀、特にその後半期におけるハーン一族の圧倒的な攻勢の中に、一般のサイト階層が以前よりも後退し、殆んどがボルジギン氏の「臣下」となつたことは事実であろう。が、依然としてある程度の集団の長たる領主の立場を維持したという事が出来る。もつとも蒙文年代記において興味あることは時代が進むにつれて *noyad sayid* (ノヤンら、サイトら) と並記する以外に、*noyad tusimed* (ノヤンら、トゥシメルら) と並記される⁽⁴⁷⁾ ことが多くなつてゐることである。*tusimed* は「官吏 (чиновник)」とか「高位(官)の人」とかいう意

味であり、或いはウラジミルツォフがサイトたちが急速に役人 ЧИНОВНИК に急変した、という見解の根拠にしたものかもしれない。しかしながら盧竜塞略、卷十九、訳部の品職門に、「臣官曰土失綿……吏曰必闊赤」とあり、臣宰（土失綿 tusimel）と吏（必闊赤^ト）を分けている。従って、tusimel をすべて単なる役人とするのは誤りであろう。以上のことからウラジミルツォフが、サイトについて「今や真の封建諸侯の中に加われず、しばしば世襲的なものではあつたにせよ、単なる役人 ЧИНОВНИК に急変した」とする見解には従うことは出来ない。

(四) おわりに

以上十五世紀末から十六世紀におけるハーン一族とサイトの関係、その状況を中心に述べた。簡単に言うならば、十六世紀における一大転換期において、サイト階層は重要な役割を果し、その後のボルジギン一族の大進出においても、その力を保持し領侯としての立場を存続させたということである。ダヤン・ハーンの即位もトゥメト部を中心とする有力なサイトの力に依つたようである。ダヤン・ハーンとしての力そのものはさして強いものではなく、その子バルス・ボラトの力に支えられた感が強い。ダヤン・ハーンの息子を有力なサイトたちが養子として迎え入れたことは、その勢力をより返そうとしたこともさることながら、チンギス・ハーンの後裔と密接な関係を持ち、その勢力を温存させようとしたためであろう。いわゆるノヤンとサイトとの関係で最も大きな影響を与えたのは、ダヤン・ハーンとバルス・ボラトによるいわゆる右翼部討征よりもむしろアルタン・ハーンの活動であろう。その後、ボルジギン氏族は戦斗、掠奪の主導権、明との交易権を握り、その優位を決定づけると共に、これに対するサイト階層はその隷属の度を深めた。しかしながらこのことはサイトたちが領主としての従来の立場を放棄した

ことを意味するものではなく、一部のサイトはボルジギン氏族と対等以上の力を持ったようである。

以上のことは十六世紀以降モンゴリアの支配階級が、新たな、また複雑な様相をとったことを意味する。従って史料的な問題もあるが、従来ボルジギン氏族の動きに目を奪われがちであるけれども、これらサイトの活動を知ることには重要なと言わねばならない。この小論ではその点をも意図したが、いろいろな制約から、せいぜいサイトたちが、依然として領侯の立場を保持した、ということを確認したにすぎない。従ってモンゴリアにおけるその活動、その役割等のいろいろな問題は残されたわけで、この点はまた稿を改めて記すつもりである。

(註)

- (1) 例えは L. Ligeti (ed.) *Monuments Preclassiques*, I—II, Budapest, 1970—2 参照
- (2) Rev. A. Mostaert & F. W. Cleaves (ed.) *blo bzan bstan 'jin Altan Tobci, A brief History of the Mongols, Scripta Mongolica I*, Cambridge 1952, II, p. 171 (以下 Altan Tobci Nova 以下略称) Ca'an Teüke, I—v (W. Heissig: Die Familien— und Kirchengeschichtsschreibung der Mongolen I, Wiesbaden, 1959, facsimilia, p. 4)
- (3) Altan Tobci Nova II, p. 144

E. Haenisch (ed.) *Eine Urga—Handschrift des mongolischen Geschichtswerks von Secen Sagang* (alias *Sanang Secen*), Berlin, 1955, 70—r (以下ウルガ本々略称)

(4) ウルガ本 70—v

(5) ウルガ本 68—v

- (6) ウルガ本 68-1v, Pelinglei (ed.), Byamsba: Asara'yi Nereti-yin Teüke, Ula'yan ba'atur 1960, p. 73
- (7) ウルガ本 69-1v Rev. A. Mostaert & F. W. Cleaves (ed.) Rasipungsu'γ.; Bolor Erike, Scripta Mongolica III, Cambridge, 1959, part III, p. 457-a 森川「中期モンゴルのトゥメンについて」『史学雑誌』八一―、三六―四五頁参照。
- (8) B. Я. Брадичевский: Оби ерченхайн Сртой Монголор сур. 151-3 外務省調査部訳『蒙古社会制度史』、生活社、一九三二、三四五―九頁。
- (9) ウルガ本 58-1v 59-1v Altan Tobci Nova, II, p. 149
- (10) 明実録、成化十五年五月庚午（一五日）の条参照。
- (11) B. Я. Брадичевский, Указ. соч., стр. 155、邦訳三五五頁
- (12) ダヤン・ハーンについてはその名前、在位年間等必ずしも確定的な見解は無い。しかし明・成化二十三年（弘治元年頃即位、嘉靖三年頃まで、ほぼ三十八年間その地位にあったとする見解が有力と思われる。
- (13) ウルガ本 61-1v-62-1v, Altan Tobci Nova II, pp. 160-64
- (14) 例えはマンドフイ・ハトンがダヤン・ハーンを箱に入れてオイラトに攻め入ったという話は、その前のサムール・タイフがマハクルキス・ハーンを箱に入れてオイラトを攻撃した、という話（ウルガ本 59-1v）と全く重複するものである。この説話については岡田英弘氏がすでに口頭で話されたことがある。（『野尻湖クリルタイ紀要』京都、一九七二、三一頁）。
- (15) Altan Tobci Nova II, p. 153

(16) ウルガ本 61—v

(17) 和田清 『東亜史研究—蒙古篇』 東洋文庫、一九五九、五〇八頁。

(18) ウルガ本 66—v, 68—v 他 Altan Tobci Nova, II, pp. 107, 175,

(19) 和田前掲書、七一〇頁。

(20) 同書七一〇頁。

(21) このことは北虜世系の我折黄台吉の後裔、三雲壽組考、卷二、封貢考の虜酋市場、更には万曆武功録、卷九、哆囉土蛮把都児黄台吉列伝等によって明らかである。

(22) ウルガ本 54—r. Altan Tobci Nova, II, p. 147. なお Altan Tobci Nova はこれをただ Môngke としている。

(23) 明実録、弘治十二年五月乙丑(六日) 和田前掲書、四四八頁。

(24) ウルガ本 59—v

(25) ウルガ本 60—v

バルス・ボラトが右翼を統轄するジノンとなった時、オルドスと共に、養子として行ったモンゴルジンもその支配下に入ったことは当然と言わねばならない。このことは後にも若干ふれる。

(27) ウルガ本 69—r

(28) ウルガ本 79—r

(29) トゥメト部はほぼこのようであったと思われるが、実際にはもっと複雑な面がある。それはロシア皇帝の命をうけて一六一九年モンゴリア西部を通じて中国に達した *Иван Петрович* の報告である。それによると、

Чечен のウルスから次のウルスまで四日かかる。ウルスは「Тудан—Тумер」と言う。そこに在る領侯は「Таiky—кагыт」という。また「Таiky」のウルスから次のウルスまで三日かかる。Юрчин とらう「Царь Вушукту」が在る。Царь Вушукту から次の Желты Мургаи 人のウルスまで二日かかる。ウルスは「Мугачин」とらう。そこに在る女領侯は「Манчи—кагыт」でその息子は「Очичи—Таичи」である。(И. Ф. Демидова и В. С. Мясников (ред.): Первые Русские Дипломаты в Китае, М., 1966, стр. 42)

とあり、更に「Пергичи」は「Валичин」すなわちフフ・ホトを経つて「Шию капта」すなわち張家口に入っている。ここに記されている「Тудан—Тумер」が「Доложан Түмед」Юрчун が「Уйчуrcin」Мугачин が「Mongjoljin」に比定されることは言うまでもない。この報告によればこれら三集団が全く別個の集団のようであり、また問題なのは「Mongjoljin」が本来なら「^{蒙古}蒙古」に含まれるはずの「Dolojan Tümed」や「Уйчуrcin」と同列に記されていることである。これらと「Arban qoyar Tümed」との関係はどのようなものであるのか。ただ後の方に「Mongjoljin」を支配している「Манчи—кагыт」は「すべてのモンゴルの地に、すべての町に命令する」と記され(там же, стр. 43)「Mongjoljin」がその中でも最も大きな力を持っていたようである。

(30) ウルガ本 64—r

(31) ウルガ本 69—r

(32) 明実録、景泰三年二月壬午(一八日)の条

(33) ウルガ本 60—v Altan Tobci Nova, II, p. 153

(34) 鄭曉『皇明四夷考』韃靼、葉向高『四夷考』卷七等。

(35) 明実録にこのようなことが記されていないことはともかくとして、葉向高が四夷考の中で「Даян・Хан」と「ホサイ」の関係

をまず「火篩者脱羅干之子、小王子部落也。狡黠善用兵。劫諸部、屢寇辺、獲財畜、日強盛跋扈、与小王子争雄長」とし、更に「小王子与火篩警殺、火篩死、後以他事怒亦不刺、欲殺之」と記したのは、全く鄭暁の皇明北虜考と皇明四夷考の記事によるものである。ただ鄭暁は北虜考の中で「火篩本王子部落、強悍既屢寇辺。獲財畜、日強盛跋扈、与小王子争雄長」としたのを皇明四夷考では「火篩者小王子部落也、与小王子警殺、小王子益衰」と改めた。この違いを知らずに葉向高はこの二つの記事をそのまま踏襲したものであるが、鄭暁が「与小王子争雄長」を「与小王子警殺」と改めたのは甚だ根拠が薄い。

(36) Altan Tobči Nova, II. p. 174

(37) ウルガ本 65—v—66—r

(38) 例えばバヤン・ムンフをマンドゴリ・ハーンのところへ届けた四人のサイトをダルハンとしたのは蒙古源流はダヤン・ハーンとしているが、シラ・トージヤボロール・エリへはマンドゴリ・ハーンであるとしており、むしろその可能性が強い。

(Н. П. Шастина (ред.) Шара-Гуджи, Монгольская летопись XVII века, М., 1957, стр. 69 Bolor Erike; part III, p. 435-a)
 (39) Шара Гуджи, стр. 107—9 なるこのことについては別稿を用意している。

(40) Там же, стр. 108

(41) 和田清「中三辺及び西三辺の王公について」『俺答汗の霸業』(前掲書六六七—八一二頁)

(42) ウルガ本 67—v

(43) ウルガ本 71—v

(44) ウルガ本 84—r—v

- (45) しかしたブナンは大きな目でみればやはりサイトに属した。例えば蒙古源流は「Lama skab taunong, Erke tabunong の兄弟二人、Berke Jayisang, Bolun gatan qosi Yuci」という四人のサイトは……」と記している。(ウルガ本 87r)
- (46) 青木富太郎「蒙古の称号タブナンについて」『和田博士古稀記念論集』東京、一九六一、一五～二五頁。
- (47) ウルガ本 79—v, 86—v, 91—v
- (48) F. D. Lessing; *Mongolian—English Dictionary*, California, 1960, p. 857
- (49) 石田幹之助「虜童塞略」に見えたる漢・蒙対訳語彙について『蒙古学』二、一二八頁。
- (50) В. Я. Владимирцов, указ. соч., стр. 155

(大学院学生)